二〇二三年度 日本近代文学会春季大会 国際研究集会

【文学のインターセクション 翻訳とテクストの複数性】

【大会趣旨文】

第４回国際研究集会では、「文学のインターセクション」をテーマとし、様々な要素が衝突し、混ざり合い、交差する場＝インターセクションとして、文学を捉え直してみたい。言語・空間・時間等、文学テクストの上で異質なもの同士が交わりあい変質する様相に注目しながら、その接触や多層性を明らかにすることを試みる。

その中心的な論点のひとつが翻訳である。翻訳をめぐってはこれまで多様な議論が展開されてきた。ポストコロニアル批評やカルチュラル・スタディーズにおいては、翻訳という営みが植民地に対するまなざしや国民国家の形成にいかに関与してきたのかが問われてきた。また近年の世界文学をめぐる議論においては、英語中心主義を相対化する翻訳行為の可能性が示されている。

翻訳は、原典の情報をできるだけ忠実に伝達することが求められる一方、原典から生みだされた新しいテクスト、すなわち創造的・対話的な行為として捉えなおすこともできる。翻訳の対話性は、原作者と翻訳者の間にとどまらず、作者と読者の間、さらには異なる文化の間で展開する。言葉の交錯のありようを凝視することで、創造と伝達の複層的な様相が浮かび上がってくるだろう。

こうした議論をより深めるためには、個別のテクストに即した具体的な考察や多様なコンテクストに開かれた対話の場が必要である。テクストのうえで言葉は翻り、交わり、ふれあい、時には激しくぶつかりあい抵抗しながら紡がれてゆく。こうした問題に関心を持つ国内外の研究者との積極的な議論を期待したい。

6.24 2023［土］13:30~

《開会の辞》佐藤泉

《特集》翻訳の現場――伊藤比呂美『とげ抜き　新巣鴨地蔵縁起』のドイツ語・英語・ノルウェー語訳をめぐって

伊藤比呂美

イルメラ・日地谷＝キルシュネライト［ビデオ参加］

ジェフリー・アングルス

イカ・カミンカ

（コーディネーター）**坪井秀人、福尾晴香**

《総会》

《ソーシャルアワー》

6.25 2023［日］10:00~16:00

《研究発表》

〔個人発表〕

呉勤文　訳詩「グレー氏墳上感慨の詩」が育んだ創作――国木田独歩の新体詩について――

小堀洋平　「蒲団」のなかのファウスト――ファウスト主題の流通と変容のなかで――

増井真琴　古典説話の再生――巌谷小波『東洋口碑大全』論――

平石岳　夏川静江のために――蘆花没後における「灰燼」のメディアミックス――

武久真士　定型詩による《参加》と《動員》――佐藤一英「聯」論――

邱政芃　「転向文学者」の新聞小説と台湾日日新報――武田麟太郎の連載・転載作品を中心に――

杉本裕樹　〈爆撃幻想〉の文学――戦時体制下日本の娯楽小説――

解放　安部公房の初期作品にみるＧＨＱによる検閲の痕跡――「去勢」されたテクストの意味合い――

乗木大朗　福永武彦『風土』と二つの〈海彼岸の戦争〉――堀辰雄からの〈脱却〉の内実――

荒瀬康成　宗教思想の翻訳と土着化――遠藤周作「母なるもの」論――

山根由美恵　村上春樹とブローティガン――「めくらやなぎと眠る女」論――

秦光平　〈いじめ〉の当事者になるということ――干刈あがた『黄色い髪』論――

邢亜南　『ゴットハルト鉄道』における様々な「翻訳」的営為

矢吹文乃　アダプテーションと〈正統〉の記号――寺山修司『あゝ、荒野』に関わる森山大道の写真の位置づけ――

林圭介　「僕」を棄てる――村上春樹『騎士団長殺し』論――

〔パネル発表〕

稲田大貴、大川内夏樹、大場健司　宗左近の〈戦争の記憶〉と〈縄文〉言説

佐久本佳奈、大畑凜、君島朋幸、渡邊英理　地図という試練――戦後日本文学という地理空間のかなたで――

《閉会の辞》島村輝